

古典を飼いなす!?

「100分 de 名著：デュルケーム 社会分業論」(NHK・ETV) 出演始末

芦田 徹郎 (甲南女子大学名誉教授)

「星の王子さま」のことから

NHK・ETV に、古今東西の「名著」とよばれる書物をわかりやすく紹介する「100分 de 名著」という番組(25分×4週)がある。この種のジャンルとしては珍しく、長年にわたって安定した視聴率を維持しているのだという。私は、今年2月のその放送で、デュルケームの『社会分業論』についての解説を担当する機会を得た。この企画が告知されると、コアな視聴者のSNSなどには(と言っても私自身はSNSをしていないので、知人からの2次的情報である)「社会学とは珍しい」「まさかのデュルケーム」「『自殺論』ではないの?」といった、その意外性を表明する声があがったようである。意外といえ、その最たるものは講師のキャスティングだったかもしれない。「アシダって誰?」「なぜアイツが?」といった疑問をもたれた向きも多かったのではないか。そのあたりの事情も含め、今回のイベントの経緯や、その経験をとおして考えたり感じたりしたことの一部を報告したい。

甲南女子大学を退職して現役生活にピリオドを打ち、もう10年近くになる。「職業としての学問」は鳴かず飛ばずに終わってしまったが、引退後の「趣味のお勉強」がおもしろく、また大学が引き続き研究紀要への投稿を認めてくれているので、家事雑事に加えて、本を読んだり、資料を調べたり、考え事をまとめたりして、けっこう研究活動?も忙しい。目下の主たる研究テーマは、フランスの作家サン=テグジュペリのあまりにも有名な物語『星の王子さま』の社会学的読解である。

王子さまが暮らす宇宙世界では、一つひとつの星に「王さま」「うぬぼれ屋(エンターテイナーか?)」「ビジネスマン」「街灯の点灯人」「地理学者」「酒びたり(失業者か?)」といった一つの地位が配分され、それぞれの星に一人っきりで住んでいる専門家が自分の役割を忠実に遂行している。もともと王子さまが住んでいた星はその手入れに従事する「庭師」の星のようであり、王子さまは庭師修業中の見習いと思われる。

ところが、この分業世界の構成員たちは、そろいもそろって「精神のない専門人」か「心情のない享楽人」(M.ウェーバー)ばかりなのだ。それぞれが自分の小さな星に閉じ籠って職務に没入しているものの、相互に交わることも関わることもなく、他者の仕事を理解したりリスペクトすることもない。したがって、それぞれが自分の社会的役割には極めて忠実であるが、「業務命令は業務命令だ、なにも理解する必要などない」という点灯人の言葉が端的に示すように、その職務にどんな社会的意義があるのかはよくわかっていない。それ故、一方では相互の「紐帯」あるいは「連帯」というものは存在せず、他方では誰もが自尊と自虐とのあいだを揺れ動いている。まさしく、「社会学的想像力」(ミルズ)が欠如した「ホモ・ソシオロジクス」(ダーレンドルフ)ばかりなのである。

他方、庭師見習いの王子さまは、いつときは一本の美しい「花」(バラ)の手入れに夢中

になるが、やがて「花」が自分の思い通りにならないことで挫折し、ひとり不全感と孤独を抱えて「なすべきこと **occupation**」を探す旅に出る。しかし、その途次教えを乞うため立ち寄った星々の住人たちは、上記のように自分の役割に埋没している「ヘンなおとなのひと」ばかりであり、王子さまの探求の志に応じてくれる者は誰もいない。それでも、最後にたどり着いた地球で出会ったキツネから、「絆を結ぶ」ことの大切さを学び、かつてその世話に没頭したバラとの愛と責任に目覚めることになる。しかし、その絆は二人だけの狭い「親密圏」に閉じられ、「社会」からは孤絶しているように思える。「ヘンなおとなのひとたち」の世界のような「絆なき社会」は可能なのか、王子さまとバラとの関係のような「社会なき絆」は可能なのか……

デュルケームが候補に

そんなことを考えたり書いたりしていたところ、「100分 de 名著」の秋満吉彦プロデューサーが、これまで最も感銘を受けた読書体験は『星の王子さま』だと述べているのを、ネット上で目にする機会があった。じつは秋満さんは、30年ほど前まで私が熊本大学教養部で教鞭をとっていたころの学生である。当時私の研究室に出入りしたり、たむろしていた学生のうちの少なからぬ面々とは今も交流が続いている。秋満さんも、貸した蔵書が線引き、書き込み、頁折りと、狼藉の限りが尽くされて戻ってきたことがあったりして、印象に残るひとりではあるが、卒業後は音信が途絶えていた。彼が当の番組を担当していることは放送のクレジットで私も知っており、その活躍を喜んではいたものの、とくに用もないので連絡を取ることはなかった。

それが「星の王子さま」のよしみということで、拙論の抜き刷りを3点ばかり放送局宛てに送ってみたところ、すぐにメールで返信があった。「星の王子さま」論は後で読むとして、番組で『宗教生活の原初（基本）形態』をテーマにするとすれば、どんなふうに仕上げることができそうか、意見を聞かせてほしいとのことである。私がデュルケーム研究者の端くれであることを憶えていてくれたのである。

しかし、『原初形態』は社会学を越えて他の学問分野にも大きな影響を与えた重要な研究ではあるものの、その全体像を番組の限られた枠内で一般視聴者に受け入れてもらえるように構成するのは難しい。そのように答えたものの、デュルケームを取り上げてもらえるのなら有難い。そこで、今日的な課題ともダイレクトに繋がり、意表を突くところがありながら一般の視聴者にも比較的わかりやすく、興味ももってもらえると思われる『自殺論』はどうかと提案してみた。もうひとつ『社会分業論』という手もあるが、これも社会学史的には画期的な文献であるが、デュルケーム研究の専門家でもなければ、さほどわかりやすくもおもしろくもないので、あまり勧められないともつけ加えた。

それなら直接会ってもう少し詳しい話を聞きたいということだったので、数か月経ってからであるが、神戸まで出張取材にきてもらった。甲南女子大学図書館で2～3時間、同館に所蔵されているデュルケーム文献の初版本などの参考資料を見せながら、近年の社会学の動向やデュルケーム社会学全般の性格にも触れつつ、主として『自殺論』の要旨やその社会学史のおよび現代社会論的意義について解説した。

そのときすでに、『自殺論』解説を前提に講師候補として思い当たる方々を何人かリストアップし、簡単なプロフィールとともに先方に伝えていた。ただ、私自身が番組に出ることは想定していなかった。長らくデュルケームに付きあっているとはいえ、大した研究業績もなければ知名度にもタレント性にも欠ける、たそがれ老人の出る幕ではない。退職教員という身であれば、今さら業績も功名も気にする必要はない。いくら毫碌したとはいえ、それくらいの自覚はある。取材後の酒席でも、少し酔いが回った私は、『自殺論』もデュルケームも脇に置いて、「星の王子さま」のことばかりを繰り返すように語った気がする。

それでも秋満さんは、私の話から『自殺論』で番組をつくれるという感触を得たようである。まもなく、「万が一」私が講師を務めると仮定して、4回放送分の構成案をつくってほしいとの依頼があった。「教え子」の仕事の助けになるなら協力するにやぶさかでない。そこで、『自殺論』や他のデュルケーム文献を読み直してみると私なりに結構新しい知見も得られ、やや詳しいレジュメを届けたところ、これでいけるので企画を進めるとのことである。私としては狐につままれたような成行きである。なんでも講師の業績や知名度は、番組の出来不出来や反響の良し悪しとは必ずしも連動しないのだという。「だからアンタでも大丈夫！」ということのようである。そんなものかと半信半疑でいたところ、案の定、「思わぬ障害が発生したので善後策を相談したい」との連絡が入った。

『自殺論』が禁書!? それなら『社会分業論』で

懸念どおり講師起用についての異論があったのだろうと観念したが、あらためてその理由を聞いて驚いた。企画会議に諮ったところ、「名著」といえど『自殺論』は、よほど周到な準備をしても、対処が難しい誤解や取り返しのつかないインパクトを与えかねず、番組の主題にするのは不可能だと、かなり重苦しい雰囲気の中で告げられたのだという。実はそれまでも、秋満さんからは、自殺は非常にデリケートなテーマであり、未遂者や遺族への慎重な配慮も必要なので、「[今となっては] やや過激なところのあるデュルケームの主張の部分」の取り扱いについてはあらためて相談させてほしいと、釘を刺されていた。

公共機関として各方面への細やかな配慮は当然の要請であろうし、自殺を扱う番組がどの方面にどのような影響を及ぼすかわからないという心配も納得がいく。それにしても、社会学を学ぶ者の必読文献といって過言でない『自殺論』そのものが一種の「禁書」になるという事態は、私の想像を絶するものであった。放送局内のコンプライアンス事情に通じているはずの秋満プロデューサーにして、後に「甘くみすぎていた」と振り返っている。しかし、あらためてNHKや公共放送への昨今の風当たりの質や強さを顧みれば、保身と組織防衛を優先しての萎縮・自粛と笑うことも難ずることもできない。『自殺論』のキー概念である「社会的潮流」（社会的事実）が振るう「外在的拘束性」の威力を、したがってデュルケームの所論の正しさを、皮肉なかたちで、まざまざと見せつけられる思いであった。

当事者の心情に寄り添うことの大切さや、言論が及ぼす結果への配慮は、重々理解できる。しかし、そのことで規制や自重が過ぎれば、かえって問題の的確な把握や解決に資することを難しくするのではないか。アカデミックな研究や教育の現場では、まだそれほど外的・内的規制が強いようには思えない（と言っても、私が直接知っているのは10年近く

前までである)。しかしいつの日か、大学においてさえ『自殺論』が「有害図書」として「焚書」の憂き目に遭ったり、「秘書」として特別な権限者以外は閲覧禁止になるようなディストピア的状况の到来も、あながち杞憂では済まないかもしれない。公共の場やメディアで客観的・理性的に自殺を語ることがはばかられ、逆にネット空間などでは自殺への誘導や誹謗中傷の情動的で独善的な言説がうごめく、「死のポルノグラフィー」(ゴーラー)の変種としての「自殺のポルノグラフィー」化とでもいうべき状況はすでに広がっている。

ことの理非はともかく実状がそうであれば、差し当たって『自殺論』での企画は諦めざるを得ない。ところが、企画会議についての秋満さんの印象では、『自殺論』自体をテーマとするのは無理筋としても、デュルケームの社会学や近現代社会論についてはかなりポジティブな反応と評価があったのだという。そこで、『社会分業論』で仕切り直しましょう」という提案である。しかし私見では、すでに伝えてあるとおり、この書物は、社会学研究者でさえそう読みやすいものではない。まして一般の読者にとっては、わかりやすくもおもしろくもないと容易に予想がつく。それでも秋満さんは、「旧師」にもちかけた企画の頓挫への負い目があってかなく、か、「やりましょう！」と強気である。

私にしても、同書については比較的近年も論考をまとめたことがあって、いくらか見通しがつかないわけではない。そこで少し構想を練ってみることにした。「乗りかかった舟」ではあったが、秋満さんには「意欲満々」と映ったようである。『自殺論』と同様、『社会分業論』も注意深く読み返してみると、今更ながらに思いがけない発見がある。秋満さんによれば「名著は現代の教科書」というのが番組のモットーとのことだったが、問題は、100年以上も昔の知見をどう今日の社会状況とつなぐかである。この軸がないと、番組の趣旨にそぐわないし、一般視聴者の関心に応えることも興味を喚起することも難しい。

秋満さんからは、必ずしも学界の定説にこだわることなく、講師独自の視点から大胆にその現代的意義を語ってほしいとの要望であった。研究報告でも専門授業でもない教養番組なのだから、とりわけ「わかりやすく」「おもしろく」という要請は得心がいく。それでもやはり、デュルケーム研究者や社会学者の視線は気になるし、ウケを狙って現代風にアレンジした挙句、一般の視聴者や読者に誤ったイメージを植えつけるような読解の提示は慎まなければならない。

しかも、そもそもこの書は、立論が複雑に入り組んでいて最後まで読みとおすことさえ一苦勞の難物である。この企画が確定してから番組制作のスタッフや番組テキストの編集者にも読み込んでもらうことになるのだが、その読後感も、押しなべて「難儀した」ということであった。「難解」と定評のある書物の企画をいくつも手がけてきた秋満プロデューサーでさえ、「へトへトになった」と私に漏らしている。

ちなみに、番組のホスト役である伊集院光氏は、原著(邦訳)はもちろん、私が執筆した番組用のテキストも読まず、直前にブリーフィングを受けるだけで、収録に臨んでくる。この番組ではいつものことだという。それであるの当意即妙のレスポンスには感服するが、そうした才が「タレント」というものなのだろう。予備知識のない一般視聴者の代表役ということであったが、普段の講義や講演ではまず出会わない、打てば響く「受講者」であった。他方、進行役を務める安部みちこアナウンサーには、脱線するところもある伊集院氏の発言を巧みにハンドリングするなど、「聡明」という印象をもった。その彼女にして、

いつもどおり事前に原著(邦訳)読破を試みたものの、久しぶりに途中で断念したという。

「個人」(個人化・個人主義)というプロブレマティック

そこで、「個人化社会における連帯の困難と可能性」を基軸に据え、原著の構成を大幅に組み替えて紹介・解説することにした。そのことで、一般視聴者にはアクチュアルな関心を寄せてもらい、デュルケームや社会学に近い人にも何ほどかの知的刺激になり、そして何よりも、読者を悩ます入り組んだ論述にも一本の心棒が貫いていることを理解してもらうことを狙ったのである。「個人化」は、今日最も重要な社会学的トピックスのひとつであるが、それこそ、デュルケーム社会学全体をつらぬく、M. ウェーバーの「合理化」に匹敵するほどの、核心的なプロブレマティックだと私は捉えている。加えて、デュルケームの全体像とともに社会学というものへの案内にもなるよう、方法論を含めた彼の他の著作やエピソードにも言及するようにした。

社会に軸足を置いた個人と社会との不均等的二元論とは、ほぼ共有されたデュルケーム理解といえる。しかし、こうした「社会」(的事実)という「一種独特の实在」を強調する理論構成の背後には、伝統的社会の動揺とその裂け目から澎湃として湧き出してきた「個人」とはいったい何者なのか、という強い問題意識がある。デュルケーム社会学の理論的準拠は確かに「社会」であるが、その時代的現実認識の原点は「個人」にある。この、それこそ一種独特の「人格」は、心理学では説明できない。「個人」の誕生と台頭こそが、デュルケームをして、その説明装置としての「社会学」の確立へと駆り立てている。

デュルケームにとって、「個人」(個人的人格)の出現と成長は「事物の本性」にもとづく歴史法則の必然である。そしてそれは、近代社会における道徳的混乱の元凶であるとともに、その再建を託すことができる「可能性の中心」(柄谷行人)でもある。1960年代から70年代にかけての「デュルケーム・ルネサンス」は、デュルケーム社会学における「個人」の決定的な重要性を明確にしたことにおいて画期的であった。しかしそれは、「個人」の「可能性」への期待を強調するあまり、「個人」についての初発の危機意識を置き去りにしてしまったのではないか。デュルケームにとって、「個人」(個人化・個人主義)は、確かに問題解決系のプロブレマティックでもある。しかしその前に、何よりも問題提起系のプロブレマティックであることを忘れてはならない。

私には、「ルネサンス」以降広く受け入れられている「道徳的個人主義」論が、むしろ「個人」というプロブレマティックに内在する毒と牙に目を背け、平板な予定調和論に陥っているのではないかという危惧がある。当事者の心情に寄りそったり配慮したりしての(と釈明される)『自殺論』の禁書扱いには、「個人(人格)の尊重」という予定調和的楽観主義の綻びの臭いがする。「道徳的個人主義」にも、「常軌を逸した個人主義」(『自殺論』)の危険性は潜んでいる。

こうした私の基本的なデュルケーム社会学理解を背景に、この企画の構想を練っていった。自由で自律的な人格(個人)の出現は、環節的社会と機械的連帯の衰退にともなう必然であり、事実として否定することも拒否することもできない。しかし、自由や自律の拡張は、一方では人びとの個性と多様性を広げるものであるが、他方では相互に分離させ、

孤立させ、対立させ、ひいては社会の動揺に拍車をかけるものでもある。デュルケームの近代社会認識では、まず何よりも後者の道徳的混乱に目が向けられている。

なぜいま『社会分業論』なのか？

デュルケームは、『社会分業論』第一版の序文で「本書をあらわす機縁 *l'origine* となった問題は、個人的人格と社会的連帯との関係の問題である。個人がますます自律的になりつつあるのに、いよいよ密接に社会に依存するようになるのは、いったいどうしてであるか。個人は、なぜいよいよ個人的になると同時にますます連帯的になりうるのか」と、初発の問題意識を明言している。この『社会分業論』の「原点 *l'origine*」は、私のデュルケーム解釈の原点でもある。

いかにして「個人の自律」と「社会的連帯」との深刻な「二律背反」を克服して、道徳の「病的状態」を解消しうるか。それを、「社会的分業」の進展というもうひとつの「社会的事実」に即して探求すること、これが『社会分業論』の狙いである。ここをまず明確に示したい。デュルケームはこの二律背反を「表面上の」と形容しているが、これは、自説の展開に先立って、論証も実証もまたず、その正当性を予告する言葉の綾であろう。

しかし、こうした分業による連帯、すなわち「有機的連帯」の可能性を探るデュルケームの試みは、現実的にも理論的にも成功したとは言えない。現実的には、デュルケーム自身が慨嘆するように、「分業の異常形態」の蔓延という「事実」がそれを示している。理論的には、分化した社会的諸器官（個人はその最小単位）のあいだの事実的連帯（客観的な機能連関）と、自律した個人どうしの道徳的連帯（自覚的な意味連環）とを接合する説明には説得力が欠ける。分業が経済的生産性を高める以上に機能連関としての「(有機的) 連帯」を促進することを論証しているとしても、人びとのあいだの道徳的結合（意味連環）としての「連帯感 *sentiment de solidarité*」の醸成の証明までには至っていない。

個人の自律と社会的連帯との二律背反というアポリアは、個人化と分離・孤立、グローバル化と分断・対立が深刻さを増す今日、解決が急がれる喫緊の課題である。『社会分業論』は、この課題の重要性を、近代の成立期において提起した先駆的かつ画期的な研究である。その解決の試みは、立論が複雑に錯綜した挙句、結果的に必ずしも成功したとは言えない。しかし、それはまた、私たちが直面する問題が容易ならざるものであることを、逸早く身をもって示しているとも言える。それ故、『社会分業論』において示された的確な問題意識と、必ずしも実を結ばなかった知的格闘との軌跡は、我々に残された遺産であり宿題でもある。130年も昔に出版されたこの書がいまも読まれるべき、色あせぬ「名著」であることの理由はそこにある。

こうした構想をもとに企画会議にかける資料の原案を送り直したところ、こんどはすんなりと採択される運びとなった。以上が、私がこの番組で『社会分業論』の解説を担当することになった経緯である。「縁は異なるもの味なもの」というが、学生との「縁」（それに「星の王子さま」の「縁」も）がなければ私の出番はなかった。番組の収録に当たっては、熊本在住の秋満さんの同期生 2 名が遠路東京のスタジオまで駆けつけて立ち会ってくれ、収録後はそろっての慰労と懐旧の一席を設けてくれた。「縁」に感謝である。

「依存」というキーワード

ところが、企画が進み始めてから、番組制作及びテキスト編集のスタッフに対するレクチャー用の資料としてやや詳しいドラフトを作成したところ、秋満プロデューサーからNGが突き付けられた。「『社会分業論』には限界があるので、後のことは自分たちで考えましょう」が結びでは、教室の学生ならいざ知らず、一般のTV視聴者というものは納得してくれない。講師独自の視点からでいいので、もっと踏み込んだ結論ないしは問題解決の提言なり処方箋なりを見せることが必要だというわけである。

この要求には、少し考えさせられた。社会学研究者であった立場からすれば、安易にもっともらしい知見や提言をまとめるよりも、問題は問題として真摯に向き合いたいという気持ちがある。学生たちにも、手っ取り早く「正解」を得たり結論を出すことより、愚直に問い続けることが大切だと言ってきた。しかし他方、卒論指導や査読などでは、結論が不明確だとか、アピール性に欠けるとかという意見を述べたことも度々ある。まして、一般の視聴者の側に身を置けば、親しみもなければ読みやすくない昔の外国文献に付きあわされた挙句、「この書は必ずしも成功しているとは言えない」では、いくら社会学の名著だと言われても、釈然としないという気持ちが残ることは容易に想像がつく。

『社会分業論』（初版）以降、デュルケームは、「職業集団」（中間集団）や「人格崇拜の宗教」（道徳的個人主義）といった、社会（道徳）の再建に向けてのアイデアをいくつか提起している。しかし、これらとて、「分業にもとづく連帯」に比べても、今日一般の人びとの心をとらえるほど、十分に練られた構想とは言えない。それに『社会分業論』での議論からまるまる離れてしまうのも好ましくない。そこで私が着目したのは、「依存 *dépendre, dépendance, dépendant*」という言葉の使い方である。

物質界であれ生命界であれ、すべてのものが相互に依存しあっている（関わりあっている）というのが、デュルケームの原理的な世界観である。もちろん、人間の世界（社会）も同じである。とはいえ、機械的連帯（環節的社会）と有機的連帯（組織的社会）とでは、個人が社会から自律している后者よりも、社会に埋没している前者のほうが人びとの依存度は高いように思われる。ところが興味深いことに、機械的連帯と有機的連帯との対比でデュルケームが「依存」という言葉を使うのは、「機械的連帯は、個人を無媒介的に社会に直接結びつける。有機的連帯では、個人は社会に依存する。個人は社会を構成する諸部分に依存するからである」というように、もっぱら有機的連帯を語る場合に限られている。有機的連帯については諸器官の関係も含めてこの言葉を随所で用いているが、機械的連帯についてはどこにも使っていない（ただし、環節動物の環節間の説明で一か所使っているところがある）。これは、この機会にテキストを読み直していて気づいた、「目から鱗」ほどの「発見」であった（私だけが迂闊だったのかもしれないが）。

つまり、有機的連帯とは、自律した諸個人の（相互）依存の体系ということである。個人は、自律するからこそ社会への依存が必要になり、依存できる社会があってこそ自律が可能になる。それに対して機械的連帯については、個人の社会への関係は、自律以前の、したがって依存以前の、いまだ自律も依存も問題とならない「一体性」あるいは「未分離」

として捉えられている。それ故、環節的社会には、厳密な意味での「個人」は存在しないのである。近代的「個人」は、確かに「自律の主体」である。しかし同時に、むしろそれ以上に「依存の主体」でもある。ここが肝である。

そうすると、今日しばしば自律（自立）を自賛する社会的強者とは、実は、社会（経済的・政治的・文化的・教育的 etc.制度）への依存機会に恵まれた人たちであろう。逆に自律（自立）していないと思われがちな社会的弱者こそ、そうした依存機会を奪われた挙句に自律（自立）という名目で孤立を余儀なくされがちな人たちである。デュルケームの有機的連帯（自律 - 依存）論は、今日の格差社会の構図を反転させ、新たなパースペクティブを開く契機を提供してくれている。

こうして、「依存」をキー概念にして、中間集団論や道徳的個人主義論を織り込み、レオン＝ブルジョワらの「社会連帯主義」の考え方も引証しつつ、すでに「社会」からなにほどこ分離しており、さらに今後も分離が不可避的に進むであろう「個人」が、「孤立」するのではなく「自律」するためには、誰もが「依存」できる社会環境の（再）構築が必要だということを結論とすることにした。

依存ないしは相互依存を世界の成立の根源だとする思想は、古今東西珍しいものではない。また近年は、ケア論や当事者研究などの分野で依存の再評価がひとつのトレンドになっている。そこには、自律（自立）という近代主義的理念偏重への懐疑や反省もあるのだろう。自律（自立）は大切だが依存も必要（どちらもほどほどに）といった、バランス論的な論調も巷間よく聞かれる。あるいは、依存することこそが自律（自立）することといった、やや倒錯的（戦略的にだろうが）と思われる依存復権論さえある。

デュルケームの社会連帯論は、今日の未だ混乱した依存復権論の現状において、それらを整理し、整合的に再構築するうえでの理論的根拠を、近代の初頭においてすでに提示してくれているように思える。かつて一体化していた（環節的）社会から分離した個人（近代人）は自律せざるを得ず、ひるがえって個人の自律が確保されるためには（組織的）社会への各人の適正な依存機会が保証・担保されなければならない。これがなければ、もともと個人（個人化・個人主義）に内在する孤立・分断・対立は深まるばかりである。「分業の異常形態」論は、この社会的依存機会の不適切（不平等・不公正）な配分構造を指摘・批判した「格差社会」（依存格差）論として捉えなおすことも可能である。

ただ、この「依存」という言葉には、弱者あるいは下位のものから強者あるいは上位のものへの「従属」や「寄生」といったニュアンスがあり、しっくりこないかもしれない。『星の王子さま』のキツネは、誰かと「絆を結ぶ」ためには「飼いならず」（アプリボアゼ *apprivoiser*）ことが必要だと王子さまを諭す。この言葉は、物語全体を理解する上でのキーワードであるが、その「上から目線」には「依存」とは逆方向の違和感がある。しかし、キツネが言う「飼いならず」には、もともとのニュアンスを残しつつ、相手の身になって丁寧に働きかけ、心の距離を縮めていくという新たな意味が込められている。デュルケームの「依存」というキーワードにも、ただもたれかかったり取り込まれたりするのではなく、ポジティブに関与し参加するという含意を読み取らなければならない。

実はそうした「依存」論をより説得的に展開するためには、『社会分業論』で用いられている *«indépendance»* と *«autonomie»*、日本語の一般的用法としての「自立」と「自律」と

という言葉の意味を吟味し、それぞれ再定義する必要がある。「*indépendance*」と「自立」、*«autonomie»*と「自律」を、それぞれ単純に対応させることは出来ない。今回の非常に限られた条件の中では煩瑣になるので断念せざるを得なかったが、別の機会に試みたい。

番組・テキストづくりの「分業」と「連帯」

いろいろ紆余曲折もあったが、企画の大筋が固まってからは、特に大きな問題もなく順調に進んでいった。4回放送分の内容についての私からのレクチャー（口述取材）が終わると、その内容をもとに番組制作とテキスト編集の作業が同時に並行して始まる。レクチャー（取材）は、東京から神戸まで数名のスタッフに出向いてもらい、甲南女子大学図書館の会議室を借りて、2日間にわたって実施した。先方にはご足労をかけたが、私のほうも、ほぼ一方的に話し続けることになるので、けっこう疲れるものではあった。

番組やテキストの構成で最も留意したのは、「わかりやすさ」ということである。抽象的な概念や理屈だけでは通用しないことは、現役教師時代に思い知らされている。そこで、「社会的事実」の説明に「ガラスの天井」を使ったり、伝統的社会から自由になった個人の不安を鳥かごから放り出された小鳥の頼りなさに例えたり、社会の「動的密度」の高まりと「生存競争」の激化が分業を生むという説明に、スポーツ人口の増加とポジション争いがスポーツ種目の多様化を促すといった、イメージしやすい例を出したりした。「よくあんな例えが思い浮かびますね」と感心してくれた人もいたので、それなりに効果があったのかもしれない。もしそうなら、わからないものは「わからない」、おもしろくないものは「おもしろくない」、「センセイがわかりやすくおもしろい話をしてくれるなら、私たちだって真面目に授業を聞きます、これだけは言えます」という率直な「授業評価」で、ある種のセンスが鍛えられたのかもしれない。学生たちの直言と至言にも感謝である。

テキストは、まずレクチャー（口述取材）にもとづいて編集側が作成した素案に私が入れる。最終的には最初のドラフトとはずいぶん違った文章になったが、あらかじめ骨格が形になっていることで助かった。直接の担当者は、単著を手がけるのは初めてという若い編集者であったが、細部にわたってよくフォローしてもらった。一つひとつの指摘が的確であり、その疑問や意見を検討するうちに、表記・表現にとどまらず、論旨自体に修正を加えたことがある。同編集者からは、番組終了後に「苦心して底本を読み込んで編集にあたったことも思い出され（？）」、恥ずかしながらテレビの前で何度も涙してしまいました」というメールをもらった。社交辞令が混じった言葉だとは思いますが、有難いことである。出版人として大成されることを祈らずにはおれない。

他方、番組づくりのほうは、最初の私からのレクチャーにもとづいて、主としてプロダクション側のイニシアティブで進んでいく。番組で使う資料映像やパネルなども、プロダクションが用意する。私が少しでも関与するのは、途中でいくらかの問い合わせに答える以外は、制作作業が相当進んでからである。番組の収録が近づくと、ズームを使ってのシナリオの確認ミーティングがあり、そこで私も意見を述べるが、明らかな誤りなどは別にして、原案の大枠を変更するような時間的余裕はない。ただし、実際の収録では、必ずしもシナリオどおりに発言する必要はなく、むしろ臨機応変のコメントを要望される。収録

後の編集作業にも私が関わることは一切ない。最終的にどのような作品に仕上がっているかは、私も放送を見るまでわからない。

放送が始まってから、番組とテキストとでは、内容的にもプレゼンのにもズレがあるのではないかという意見をネット上で目にした。そうした印象をもたれるのは、上のような両方の制作過程に一因があると思われる。テキストが完成してから、それをもとに番組制作がスタートするのであれば、そうした違和感も少なかったかもしれない。

しかし、もともと映像作品と文字テキストとの性格の違いからすれば、受け取り方の違いもやむを得ないとも思われる。テキストについては、「読みやすさ」を念頭に執筆にあたったが、社会学文献の紹介として「正確さ」にも気を配った。そのぶん、一般読者には、聞き慣れない術語が並んでいて「小難しい」という感想を持たれたかもしれない。他方、教養系とはいえエンタメ性も要求される放送では、「わかりやすさ」とともに「おもしろさ」が一層要求されることになる。そのぶん「緻密さ」に欠けることになり、社会学の仲間などからは、いくつか混乱や誤解を招く余地があったのではないかという指摘を受けた。

ただ私としては、放送についても、理屈っぽい割に民族誌のような社会事象についての具体的記述が皆無に等しく、したがって映像化も至難であろうこの書物を、とっつきやすい形に具象化してもらえたことで満足している。放送が始まるや、X（旧ツイッター）などには「社会分業論おもしろい、次回が楽しみ」という、授業ではあまり聞いたことがないような感想が相次いだ（ようだ）。それだけの反応は、私の予想や期待を超えるものであった。やはり映像の威力であろう。放送で興味をもっていたいただいた視聴者には、テキストも一読していただけることを願っている。

放送後の番組ブログで、秋満プロデューサーが「今回ほど、講師と制作陣と一緒に番組を共作したという実感をもった回は稀ではないかと思います。深く感謝するとともに、「社会学的思考」の大切さを実感しました。今回の学びを今後の番組作りに活かしていきたいと深く決意しています。」と書いてくれた。私も、スタッフ諸兄姉には、「分業」と「連帯」の貴重な体験をさせてもらったと感謝している。

それぞれの評価

日ごろ私とは接点のない社会学関係者やその周辺の研究者からも、次のような「過分」と思われる感想や評価を、ネットにあげてもらっている。

《とりあえずテキストを購入して目を通しましたが、素晴らしい内容です。デュルケム入門でも社会学入門であり、私たちがこれからどのような社会をつくっていくかという未来志向の問題にも連なる話になっています。1億人以上に視聴して欲しい番組です。》

<https://x.com/isnki/status/1883829473772216775?t=SBBRFnxKUCXI-qw5SrhdpQ&s=19>

《今月のNHK「100分de名著」のデュルケム『社会分業論』、視聴&購読しましたが、めっちゃ面白かったですね！こういう本が魅力的に紹介されるのは素晴らしい。そして、このテーマでやるなら続けて、スミス『国富論』とかロールズ『正義論』とかも、ぜひ取り上げて欲しいと思いました。（なんならスミスにせよロールズにせよ、やらせてもらえ

るなら僕がやりたいくらいですが、しかし、あれだけ徹底的に一般向けにした執筆や語り
が自分にできるかという、たいへんあやしい…笑)》

[https://x.com/Tama_Goldheart/status/1894738335840780420?t=AuKy2Osu2u0GRnvo
ngUY1Q&s=01](https://x.com/Tama_Goldheart/status/1894738335840780420?t=AuKy2Osu2u0GRnvo
ngUY1Q&s=01)

[https://x.com/Tama_Goldheart/status/1894738854743335245?t=h_0C3Nna9bSwg3fe8
Aq0Qg&s=01](https://x.com/Tama_Goldheart/status/1894738854743335245?t=h_0C3Nna9bSwg3fe8
Aq0Qg&s=01)

有難いことではあるが、こうした識者の声が多数あったわけではない。身近な研究者仲間からも好意的な感想をもらったが、社交辞令の分は割り引く必要がある。多くの研究者たちからどのように評価してもらっているのかはよくわからない。一般視聴者からはおおむね「おもしろい」という感想が SNS などには上がったようだが、こうしたテーマでわざわざコメントするくらいなら、そうネガティブな声を寄せる人も少ないだろう。実際、批判的な声があることは、すでに紹介したとおりである。

ほかにも、デュルケームの時代（第一の近代化・個人化）と現代（第二の近代化・個人化）との違いが曖昧になっているのではないかという指摘も受けた。これは、私がデュルケーム社会学と現代社会論との連続性や共通性を戦略的に強調したためともいえるが、それは別にしても、第一の個人化も第二のそれも、道具立てこそ違え、基本的には同じ構図の中にあると捉えている。「デュルケームはもう古い」と、社会学の授業でさえ取り上げられなくなっているとも聞くが、その現代性はもっと注目されてよいのではないか。

もうひとつ、結論の「依存」についての論調が混乱しているのではないかという批判もあった。物への依存、他者への依存、社会への依存など、いくつか異なるレベルでの「依存」が同列に論じられているという指摘だろうと受けとめた。これも、そのとおりである。すでに少し触れたが、デュルケームの社会連帯論は、まさにそうした混乱を整理する理論的根拠になり得るとするのが私の見立てである。ただ、今回の時間的・紙幅的制約のもとでは、十分に論じることが出来なかった。まずは「依存」復権への関心を喚起することを優先して、語弊のある言い方だが「とりあえず使えるものは使った」という側面は否めない。お詫びの意味も込めて、この論題にはいずれしっかりと向き合いたい。

賛否ある中で、評価の総合点は測りがたい。それでも、プロデューサーからの情報では、視聴率もテキストの売れ行きも、なんとか合格点は取れているようである。ちなみに、テキストの初刷りが 35,000 部だと聞いてびっくりした。残念ながららというか当然ながららというか、まだ増刷には至っていない。

当初は「底本の読み込みに苦心した」という制作陣も、準備を進めていくうちに「デュルケームっておもしろいですね」という声に変わっていったという。先日、直接のテキスト担当者の上司であった編集者から、わざわざ部内異動の丁寧な挨拶が届き、「細かな点まで慎重に論を積み重ねていくデュルケームの主張を具体的かつユニークな挿話を交えてお話いただき、読者・視聴者にもグッと身近なものとして届けられたと思います」という言葉が添えられていた。これも社交辞令含みではあろうが、素直に嬉しく受け取っている。

こうしたことから、社会学 - デュルケーム - 『社会分業論』 - 芦田という微妙なラインナップにしては、手前味噌ながらもまずまずの健闘だろうと安堵しているところである。最近も、テキストの読後感として、X に次のような投稿があると元学生から連絡が入った。

《マックス・ウェーバーは読んだことがあるが、デュルケームはない。勉強になった。生活保護を受けている人が「システムに依存してる」と批判されがちだが、実はトップの富裕層こそが節税とか、利息とか、人脈とか、親とか諸々の「システム」を最大活用して今の地位を得ており、その恩恵の大きさは生活保護のそれとは比べ物にならない。というデュルケームの逆説に驚いている。／本書を書いた芦田氏自身が述べているが、デュルケームの論は現在の目から見ると、奇異に感じることや、社会にフィットしていないと感じられることも多い。しかし、社会的に成功した人のほうがよりシステムへの依存度が高いという指摘はハッとさせられたし、気づきの多い読書であった。「自助」とか「自立」が強調される現代において、壁打ちの相手として最適かも。》

<https://x.com/georgebest1969/status/1946366526074110259?t=wBEfUCxW2QRtP93TSNIMfw&s=01>

<https://share.google/MVcYs7xNACH8mHauq>

投稿者は、感染症専門医の大学医学部教授で、コロナ禍での活動や発言で注目されたひとりである。文中の「デュルケームの逆説」というのは、正確にはデュルケームの所説から芦田が導き出した「逆接」ということになろう。そうした誤解はあるにしても（どうしても避けられない）、『社会分業論』はもとよりデュルケームの名を聞いたこともなく、社会学の知識もそれほどなかった人たちにも、この方面への関心を持ってもらえる機会になったのであれば、型どおりの言葉だが、望外の喜びである。

「飼いなす」ことと「責任を負う」こと

『星の王子さま』のキツネは、「飼いなすしたものしか知ったことにならない」と言う。またこのキツネには、「ものごとは心で見なければよく見えない」「本質的なもの l'essentiel は目には見えない」という有名な言葉がある。表面的なものに隠された「本質」（これも飼いなすことが難しい危険な言葉ではあるが）を捉えるためには、心を込めて、目を凝らし、耳を傾けて、絆を結ぶこと、すなわち「飼いなす」ことが必要だということである。

デュルケームは、自説の展開に先立って「個人の自律」と「社会的連帯」との「二律背反」を「表面上の *apparente*」と形容していた。さきに私は、それを「言葉の綾」だと言った。しかし今ではむしろ、「表面的なもの」（二律背反）を飼いなすして「本質的なもの」（自律と連帯の原理）に迫ってみせる、という自負の表出のように思える。

また、『星の王子さま』の語り手である「ぼく」は、「この本を軽い気持ちで読んでほしくない」と言っている。「まともに飼いなす気もないのに、「星の王子さま」知ってる、なんて言わないでよ」というアピールであろう。実際、このテキストを何度も読み返していると、一言一句に意味があり、それぞれの言葉が相互に依存（共鳴）しあっていて、物語全体が言葉のコンステレーションを形づくっていることが少しずつ見えてくる。片言隻句といえどもおろそかにすれば、たちまち全体像を見誤ってしまうおそれがあり、とても軽々しく読めるような代物ではない。もともとは社会学的関心？から読み始めた『星の王子さま』であるが、いまでは一つひとつの言葉のピースを組みあわせて、パズルの全体像を描くことが目標になっている（まだ完成していない）。

このたび『社会分業論』を何度も読み返していて、気難しいこの書物からも同じような呼びかけが聞こえてくる気がしたものである。「飼いならせるものなら飼いならしてみな！ しっかり読んで絆を結ぼうともせず、知ったかぶりの講釈なぞ垂れるんじゃないぞ！」と。入り組んだ論述をあらためて心して読み解き、読み結び、一般の人にも近づきやすいように解説したつもりではあるが、「ぼくは飼いならした！」と誇示できる自信はない。

そもそも「飼いならす」という言葉には、ハッキングの『偶然を飼いならす』(*The Taming of Chance*) という書名が物語るように、飼いならし得ぬものとなんとか折り合いをつけるという含意がある。誰であれ何であれ、良くも悪くも、飼いならし切ることなどできはしない。心底飼いならされたりもしない。ペットや家畜でさえ、野性を奪い尽くされているわけではない。それでも、これまで見えていなかったものが見えてきた分、『社会分業論』やデュルケームの社会学との絆はそれなりに強まったかな、という感覚はある。

キツネはまた、「飼いならせば、いつまでも責任を負うことになる」とも言う。絆を結んだものからの呼びかけにはいつも応答する責任がある *responsible* し、また応答すること *respons* ができる *able* ということであろう。私もまた、そう長くは期待できないが、折につけ読み直し、その度に新たな呼びかけを聞き取り、絆と理解を深め、私が依存している多くの人たちにその知見を伝えることをとおして、応答することを期したい。それこそ、古典や名著とよばれるものを読むことの醍醐味というものであろう。

この度の「名著」解説が「教え子」の導きによるものであることや、制作スタッフに多大な尽力をいただいたことについてはすでに記した。そのほか多数の方々にさまざまな形でお世話になった。旧師、友人、知人、かつての学生たちからも、励ましの声や感想が多数届いた。番組の紹介やテキストの販売に奔走してくれた旧友もいる。

甲南女子大学には、退職後も引き続き、図書館の利用や研究紀要への投稿などで便宜を図ってもらっている。今回も、取材会場の提供や学園内外への告知などで協力を得た。また、もう 40 余年も前から数人の社会学の同人と「研究会」という名の研究会を続けているが、この会は、すべてのメンバーがフルでの現役を退いた今も、私の研究意欲の支えであり、心おきなく依存できる貴重な「中間集団」である。この会がなければ、この年齢でこの役目を引き受ける知力も意力も維持できていなかったと思う。さらに、デュルケーム/デュルケーム学派研究会には、最古参のひとりながらゾンビ会員に近い私のために、放送やテキストの丁寧な紹介のほか、放送を振り返るラウンドテーブルを開催してもらった。この報告は、そのときに話をしたり、質疑に応答したりした内容が骨子になっている。

最後に、私事で恐縮だが、この企画が具体的に進み始めてからテキストの準備が終わるまでの 1 年余りは、私の義母の入院・手術・闘病の期間とほぼ重なる。最終校正作業は、重篤におちいったため、付き添いで詰めていた病室で進めた。義母は病床にあって私のテレビ出演を楽しみにしてくれていたが、放映をまたず他界した。その間妻は、母親のケアと自分の仕事に身も心も砕きながら、私の作業に支障がないよう気を遣ってくれた。

みなさま、本当にありがとうございました。これまでの絆に感謝しながら、これからも精一杯飼いならさせていただきます……とはやはり言いにくいので、ふつつかながらアブリボワゼさせていただくことで、わが責めを塞ぎたいと思っております。つきましては、引き続きご指導のほど、どうぞよろしくお願いを申し上げます。